



●命を絶とうとした女性患者との再会

その日の朝、いつものように外来の待合室の側を通って、診察室へと急ぎました。途中、待っている患者の姿が、自然に目に入ってきます。交通事故の後遺症で苦しみ、何度か自ら命を絶とうとしたことのある中年の女性患者もその中にいました。横断歩道を歩いて渡っているときに、若い男性の運転する自家用車が突っ込んできて、跳ね飛ばされたのです。

彼女は普通の家庭の主婦で、スーパーのレジの仕事をしていました。しかし、事故の後遺症で右手に力が入らない状態で、荷物が棚に上げられないようになったのです。自分には何のミスもないのに、仕事もできなくなったと不運を嘆き、加害者を恨んで苦しんでいました。不安と抑うつ症状とともに、自律神経失調症状と思われる不定愁訴がいろいろと出ていました。半年くらい通院した後、軽い抗不安薬程度で症状はコントロールできるまでに回復したのですが、この抗不安薬がどうしても抜けない状態のまま、やがて来院しなくなっていたのです。ところが久し振りに来院するということは、また何か症状が出て、薬がいるようになったのかな……、などとといった想像が頭をかすめました。しかし、診察の順番がきて診察室に入ってきた

たときの彼女の表情は、意外にも明るかったのです。

「先生、やっと薬が要らなくなったんですよ。それが嬉しくて、お世話になった先生にぜひお伝えしたくて、今日は来ました。今日は薬も何も要りません。ただ、先生にお礼を言いたくて……」と語るではありませんか。話をよく聴けば、この3ヵ月ほどの間に思いもかけない彼女の人生の物語が進行していたのです。実は、彼女の小学生になる娘に、先天性の股関節の病気が見つかったこと。娘の学校への送り迎えを車でする必要が生じたこと。自分は自動車免許証を持っていなかったこと。そこで、自動車学校に自動車免許を取りに出かけていったこと。抗不安薬を飲んでいることを告げたところ、そんな薬を飲んでいる人は運転はできないので、まず薬を止めてからくるようにと言われたこと。そこで初めて、なかなか止められなかった抗不安薬が止められたこと。そして、このたび、自動車免許証がもらえたことなどを、矢継ぎ早に語ってくれたのです。

特に、やっと薬を止められたことが嬉しくて、お礼を言いたくて、ただそのことを筆者に伝えたいがために、診察の順番が来るまで待たなければならないことが分かっているにもかかわらず、来院してくれたのです。まさに医者冥利に尽きるという感じでした。とにかく、そのことを伝えるためにわざわざ来院してくれたことに、こちらがお礼を述べ、心から感謝したのでした。そして同時に、「子を思う母は強し!」という言葉が、脳裏に浮かんでいました。

●「人生の意味を見出すこと」

『夜と霧』という本の著者として有名なヴィクトール・フランクル (1905～1997) という

オーストリア生まれの精神科医で精神分析家がいま

す。ロゴセラピー (Logotherapy) の創始者でもあります。「ロゴ」は、ギリシャ語で「意味」を表しています。人は「人生の意味」を追い求め続ける存在であり、その「人生の意味」が充たされないことが、心の病に関係してくると考えます。そして、人が自分自身の「人生の意味」を見出すことを援助することにより心の病を癒す心理療法が、ロゴセラピーなのです。フランクルは第二次世界大戦中に、ユダヤ人であるがゆえにナチスにより強制収容所に入れられたのですが、ここでの体験をもとに、終戦後強制収容所から解放された後、著した本が『夜と霧』なのです。その後60年以上にわたって、世界中の人たちに読まれ続けているベストセラーです。フランクルによるロゴセラピーの理論は、収容される前にすでにほぼ完成していましたが、その理論の正しさを、収容された人たちの強制収容所内での過ごし方を観ていて感じ取ったのです。フランクルによれば、人にとって最も意味のあることは、自分自身にとっての「人生の意味を見出すこと」であり、「人生の意味」を見出している人間は、苦しみやストレスに耐えることができるのです。『夜と霧』の中には、このことを実証する実話がいくつも語られています。

フランクルは何度も日本を訪れており、90歳の頃に日本心身医学会総会で招待講演をされたこともありましたが、わが国での心身医学のバイオニアであり、筆者の心身医学の恩師である池見西次郎先生が司会されたのですが、感動的な講演として強く印象に残っています。近年、わが国内で「生き甲斐療法」として紹介されることのある治療法の原型がここにあります。また、人は自分が現在していることの意味が分かれば、その仕事がいくら苦しくても、そのストレスに耐えられるものなのですが、意味の全く感じられない仕事の

繰り返しには、とても耐えられないのも、同じ文脈から生まれる現象といえます。

●子を思う母の気持ちの強さ

冒頭に紹介した中年の女性患者の物語は、上記のようなロゴセラピーの理論で説明することが可能です。子を思う母の気持ち、いかに強いものであるか、ということの証でもあります。このようなことを書きながら思い出すのは、吉田松陰の辞世の句です。

幕末の日本を動かした多くの人材を輩出した松下村塾 (現在の山口県萩市) での吉田松陰の教育活動は、世界の教育界における奇跡といわれているようですが、満29歳という若さで、時の大老・井伊直弼による安政の大獄で処刑されました。吉田松陰のように、自分の「生きる意味」(使命) に目覚めると、死をも恐れない境地に達することもできるという証でもあるのですが、その獄中で書いた、自分の気持ちを門弟達に伝えるための遺書として「留魂録」があり、その冒頭に辞世の句「身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂」があります。また、家族宛には「永訣書」を書き遺しており、これには「親思う心にまさる親心 けふのおとずれ何ときくらん」という辞世の句が遺されています。

萩の松下村塾は、青春時代に訪れたことがあったのですが、十年余り前に再度訪問した際に入手したこの句の色紙が、いまま筆者の大学の部屋に飾ってあります。わが国の未来を思う気持ちが激しすぎたがために、親よりも早くこの世を去らなければならないようになった一人の男の心情が吐露されている句ですが、まさに「親思う心にまさる親心」なのではないでしょうか。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部 卒。大分医科大学臨床薬理学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。日本臨床薬理学会元理事長、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、日本学術会議連携委員、CRC連絡協議会代表世話人。響き合いネットワーク連絡協議会会長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ (大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院) の企画・運営に携わっている。

